

東京深川で松江家の4女として生まれた私の家族は、両親と3人の姉、1人の兄、そして末子の私との7人家族で、当時父は鉄工場を経営しておりました。私達は何の変哲もないごく普通の下町の生活をしていました。

そうした中、日本はアメリカに宣戦を布告しました。私の生活も変わり始めてきました。私が国民学校に入学した頃から生活が厳しく、いろいろな物資が配給制となり、学用品にも不足が出てきました。

昭和18年になるとモンペの着用が、更に防空ズキンの携帯が義務付けられるようになりました。そして東京にも警戒警報が発令されるようになりました。私の父は警防団員だったので警報音が鳴ると、すぐ仕事着を着替え鉄かぶととメガホンを肩にして、母に「後頼んだよ」と声をかけ、町の見廻りに家を出て行きました。

19年になると、国では学童を守るという名目で学童疎開の話が出てきました。母は愛知県の田舎の娘だったので私を親元に行かせる考えだったようです。ですが私のための希望で学童疎開をすることが決まりました。

私が国民学校3年生の19年8月末、学校の校庭に集合し見送りの家族に別れを告げ、上野に向かい出立しました。今と違い当時は夜行で一晩かかります。翌日の10時過ぎ、目的地の駅に着きました。ここで私達は二手に別れました。1つのグループはこの町の（商店街）の中の旅館が今後の居住地になりました。私達もう片方のグループは、そこから更に1里歩いた農村のお寺に入りました。このお寺はかなり大きく立派で、庭も広々としていました。

3年生から6年生まで総勢88名、教師2名、寮母さん2~3名が総勢です。私達児童は本堂での生活となりました。

すぐに班が編成されました。6年生が班長・副班長を務め、3・4年の面倒を見ます。以後の行動は班行動が多かったと思います。例えば掃除の範囲、入浴の順番、寝床の場所、朝晩の点呼等々。

2学期からは地元の学校で、地元の子達と一緒に授業を受けました。ここではだれからのいじめも記憶にありません。もちろん親兄弟と離れて来ているのです。何も感じないと言ったら嘘になります。冬の雪の多さに驚き、外のお手洗いにいく時の寒さ、虱の不快感等々、ではありあますが、田舎の生活がめずらしく楽しい事も有りました。

こうして年も暮れ新しい年を迎えました。たしか2月28日だったと思います。父を含めた4人の父兄が突然見えしました。驚いていると、6年生が東京で卒業式と進学の為、帰り仕度の手伝いに来たとの事で、3月3日の朝4人の父兄に引率されて、6年生約20名が、東京へ帰って行きました。あと1週間遅かったら、だれも死なずにすんだのに・・・もちろん私の父も・・・

3月10日の事は私達だれも知りませんでした。東京に大きな空襲があったと知ったのは。それから4~5日して、田舎の子から教えられましたが、それが我が身に関係しているとは夢にも思っていませんでした。少時して寮長の姿が見えないのに気付

きましたが、半月程で戻って来られました。それから3日程して大勢のお坊さん達がお寺に見えられたので「何だろう」と思っていると、先生から本堂に集合するように指示が有りました。本堂に行くとお坊さん達の読経が始まりました。その中で一人一人名前を呼ばれ先生から家族の生死の状況を知らされました。静かに泣く者、呆然としている者等々、空襲体験も無いまま、気が付いてみれば、私も孤児になっていました。母と3人の姉は遺体も見つかっていません。父は家の裏の貯木場で亡くなっていたようです。胸の名札でも確認したようです。唯一人兄は生存していました。その兄は当時中学4年で、両親と姉・妹の死亡届を出し、父の遺体を都にたのみ、進学の為、金沢に向かったようです。入学金や下宿代の金子はどう工面したのだろう、まだ16歳の兄がたった一人でさぞ心細かった事だろうと気の毒に思われて仕方有りません。

私の方も笑顔のない日々が続きました。そうしたなか8月15日を迎えたのです。この日寮長先生は聞きたい人は聞きなさいとの事で、ご自身のラジオのボリュームを上げ、私達にもラジオを聞かせて下さったのですが、雑音がひどい上言葉がむずかしくて私にはよく理解出来ませんでした。唯何となく戦争は終わった事はわかりました。

それから何日かたった或る日、突然大勢の家族が見えたと思ったら、それぞれ荷作りをして帰って行きました。一家全員死亡した子3人もどこかに連れられて行きました。後に残ったのは私を含め10人程です。今まで60人以上で寝起きしていた本堂に、その日から10名程での生活です。本堂が本当に広く寒々とした感じで、淋しく思いました。そうした生活が続いた或る日、私達にも荷作りをする日が来ました。町の旅館に移る事になったのです。お寺ともお別れです。旅館にも数名の残留者が居て、此処で約20名弱の者が翌年3月まで生活を続けました。この時にはすでに先生方はだれもみえず、寮母さんが1名と生徒だけの生活でした。こうした生活も21年の3月までで全て終了です。皆新しい生活に旅立って行きました。私は祖父に連れられて愛知に向かいました。

こうして5年の1学期から愛知の田舎での生活となりました。ここは1学年1学級です。ここで初めていじめを体験しました。不思議に何も恐さを感じませんでした。それよりも私を唾然とさせたのは、祖父の態度でした。その当時、家には祖父・祖母・母の妹が2人の4人家族でした。祖母は左片麻痺が有り、歩行不可能の状態でした。その中に私が入って行ったのです。びっくりしたのは、祖父は私に感情等無いような言動をする事です。「居候」と言われました。また「どうせ死ぬのなら、あれも買って置いてもらえば良かった」とか、預けてあった荷物を開けて好きな物を取り出したり、叔母たちにもすすめたりとか、私の目の前で行います。腹が立ちます。ですが何も言わず我慢していました。でもとうとう堪忍袋の緒が切れました。それは叔母の一人が何かが見つからなかった時、夜祖父から「お前が取ったのか？」と聞かれました。何の事かわからず、もちろん否定しました。しかしその時「今後畳の部屋に入ってはいかん」と言われてしまいました。私の居場所は板の間だけです。まったく身に覚えが有りません。くやしくて我慢出来ず、兄に手紙を書きました。まもなく兄が迎えに来

てくれました。こうして私は兄の下宿先で同居することになりました。

そして兄が卒業し就職先を東京に決めたため、戻ってきましたが、女の私の居場所が無く困っていた時、兄の友人の一人がしばらく私をあずかってくれるとの事で、彼の下宿先で世話になっていました。ところがその方がレッド・ページにあり、失職してしまったのです。私の世話どころではありません。兄のところに行きなさいと言われてしまいました。仕方ありません。今までのお礼を述べて家を出ました。しかし、私は兄の居所を知らなかったのです。仕方がありません。日中は町中を歩き、夜間は神社の御輿堂を借りて休みました。

こうした生活が1週間続いたある日、町中で、ばったり兄と出逢いました。そしてやっと借りられた1室で生活出来るようになりました。どうやら浮浪児にならずに済みました。後に、その間食事はどうしていたのか、何人かに聞かれましたが、いくら考えてもその間の事は全く記憶が無く、思い出せません。

その後、復学しましたが、約4ヶ月程学校に行けませんでした。又この頃兄から父の遺骨が猿江公園に仮埋葬されていることを教えられ、中3の時、一度確認をしに行ったりしました。ずらりと多くの墓碑が並ぶ中に父の名を見つけました。が当時の私には、それ以上何も出来ませんでした。

学校卒業時、どんなに進学したかった事か。でも望むすべの無い事は自分で分かっていました。そこで、寮が有り、手に職が着けられるものは無いかと、考えていました。そんな折、他の級で、弟と二人でおぼさんの世話になっている人からさそわれ、看護学校を受験しました。どうやら無事合格しました。有り難かったのは全寮制である事、奨学金がある事（卒後2年間の義務年月有り、以後返済の必要無し）これはとても有り難かったです。それと本当にほっとしたのは3食付いていた事です。何と言っても小学生の時から私には昼食という物が無かったのです。理想など無く、有るのは現実でした。こうして卒後資格試験も受かり、一段落してから又父の仮埋葬地に行ってみました。更地になっていて、近所の方にたずねても何処に移転したか不明でした。

それから何年たったでしょう。3月10日慰霊祭が行われている事を知りました。或る年、両国に行ってみました。そこで遺骨が保管されている事、霊名簿が有る事を教えられ、さっそく霊名簿を見せていただきました。何と父の名前を見付けたのです。ただ残念ながら名前が1字違っています。しかし松江姓は父一人です。間違いないと申し出ましたが、字が違っている人は「駄目」の一言です。あきらめました。それが昨年、納骨堂を見学できる機会が有り、同行させていただきました。その折、日頃の思いを口にした所、今は出来るだけ遺族に引き渡すようにしている由。それならばぜひ遺骨を引き取りたいと申し出て、色々書類を提出しましたが、11月に遺骨が返されました。何でも古い方の霊名簿には、間違い氏名で記載されていたとかの事でした。今、少しほっとしています。母や姉達の分も含めて、父の遺骨は今、兄の遺骨と並んで、松江家の墓で眠っている事でしょう。